

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## モンゴル万華鏡：草原の生活文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5633">http://hdl.handle.net/10502/5633</a>

小長谷有紀

# モンゴール万華鏡

草原の  
生活文化



角川選書

224

モンゴル万華鏡

— 草原の生活文化 —

小長谷有紀

# 目次

まえがき——七

## 第I部 もてなしのわざ

### 1 食のもてなし——三

塩ゆでヒツジの大盛り・シュース シュースの盛りつけかた 子ヒツジのシュー  
ス 歴史文献に登場するシュース シャムチという駅伝制度 ウマのもてなし  
歴史文献に登場するジヨマ ヒツジ肉の姿づくり・ジヨマ もてなしの制度化

### 2 歌のもてなし——六

接客の歌 ハレとケをへだてる歌 接客の場面 酒をすすめるための工夫  
接客の歌の技法・その1——対をつくる 接客の歌の技法・その2——連をつくる  
地域差をあらわす歌 観光化をあらわす歌

## 第II部 おいしさのわざ

### 1 白いごちそう——七

一日の食事 家畜の種類と乳の性質 多様性の意味をさぐる 一日の加工作業  
加工プロセスの基本方針 クリーム製品 バター精製 脱脂乳のその後 二

種類のチーズ 蒸留酒 モンゴルの乳加工体系

2 赤いごちそう ———— 三三

食生活の二季性 おいしさの源泉はヒツジ ヒツジの屠殺と解体 屠殺をめぐる儀礼 ゆでることと焼くこと 肉の保存方法 小麦粉をつかった肉料理

野生動物

第III部 癒しのわざ

1 歌って癒す ———— 二五

フォークダンスとしてのアンダイ アンダイという名の心の病 ふたつのアンダイのしかけ アンダイという名の歌う治療儀礼 親戚が排除される理由 治療の瞬間 6つの段階からなるアンダイ アンダイのながれ 結婚を再確認する

アンダイ モンゴルのなかでの葛藤

2 飲んで癒す ———— 三〇

クミスという名前 ツェゲーという名前 子ウマをおとりに乳をしぼる 馬乳酒のかもしかた 馬乳酒の風味 馬乳酒の薬効 夏の食糧としての馬乳酒

馬乳酒のまつり

## まえがき

人は、つねに環境にはたらきかけて食糧を確保し、生存してきた。植物をつうじての環境へのはたらきかけは、採集にはじまり、やがて農耕へと発展する。いっぽう、動物をつうじてのはたらきかけが狩猟であり、それが牧畜へと発展してゆく。農耕や牧畜は、人が環境にはたらきかけながら生存していくために並行的に開発してきた技術体系であった。

農耕も牧畜もどちらも大切な技術ではあるが、地域の環境に応じて、それぞれの性格にもいくらかの違いがある。と同時に、そもそも、農耕と牧畜のどちらを中心とするかという比重が地域によっておおいに異なっている。あらためていうまでもなく、日本では、家畜をつうじて食糧を確保するという牧畜的要素がきわめて低い。そのために牧畜世界に対してはあまりなじみがない、といえよう。

しかし、世界中の諸地域のなかには、生存の基盤を全面的に家畜にゆだねている、といえるほど牧畜に比重をおいた生活もまた存在している。たとえば、中近東の砂漠には、遊牧の民べ

ドウィンがラクダに依存した生活を伝統的に開発してきた。家畜という動物を相手にした生活は、もっぱら植物とかかわりつづけてきたわたしたちの生活と、どのように本質的に異なるのであろうか。環境とかかわりあうための知恵やわざは、どのように異なっているのであろうか。その秘密を知るために、わたしたちはどこまで遠くへ出かけてゆく必要があるだろうか。たしかに、目を国外に転じてユーラシア大陸をみていくと、中国、インド、東南アジアなど、やはり日本とおなじく農耕を基盤として文明をひらいた地域がひろがっている。そこでは耕作の手段として家畜を利用するなどの点からみて、日本よりはずっと家畜になじみがある。とはいふものの、生存の基盤を家畜にゆだねているというほど牧畜に依存した生活があるわけではない。すると、どうしても西南アジアくらいまでゆかなければ、牧畜主体の生活はみられないように思われるかもしれない。

家畜という動物とかかわりながら、生活の基盤を確立している世界が、じつはもっとわたしたちに近いところに存在している。それがモンゴルである。ほぼ隣国といってもよいほどの至近距離で、わたしたちになじみのない家畜とのくらしがくりひろげられている。人びとの容姿は、まったくわたしたち日本人と変わることがないというほど似ているために、思わず、なにもかもが以心伝心だと錯覚してしまう。しかし、その生活様式はまったくわたしたちのそれとは異質であり、その異なる生活のもとに文化が展開している。近くの他者の文化、そして似て

いるように異なる他者の文化、それが、モンゴルである。

三六〇度の視野がひろがる草原で、家畜とともに生きるくらし。わたしたちは、そんな「もう一つのアジア」を、モンゴルにみいだすことができるであろう。草原では、衣食住などの基本的な要素がすべて、家畜にゆだねられている。家畜という動物をつうじて環境にはたらきかける生活の知恵が展開している。そうした生活のわざを基盤として、文化のあらゆる局面が色とりどりに展開している。そんな草原のくらしを、万華鏡のようにのぞいてみたい。

モンゴルにみられる草原の生活文化は、さらに中央アジアや西南アジアの草原ベルト地域へと展開してゆく。カザフやキリギスといったトルコ系遊牧民のくらしは、モンゴルのそれと兄弟のような関係にある。また、モンゴルの出自は、草原の北方にひろがる森林地帯にくらす狩猟民にあるともいわれているほど、北方的な要素を並存している。いわば、北アジアやシベリアの生活文化とは、親子のような関係にある。

ユーラシア大陸の東の端に位置するモンゴルの生活文化は、さらに西方へ、またさらに北方へとその類似性をひろげているのである。まさにモンゴルをつうじて、わたしたちは、広範囲に展開する「もう一つのアジア」の一角を知ることができるにちがいない。